

塩田光喜著

『太平洋文明航海記—キャプテン・クックから

米中の制海権をめぐる争いまで』 明石書店 二〇一四年

馬場 淳

書

評

●太平洋史を語り直す「航海」へ

二〇一四年二月、これまでいくつもの刺激的かつ独創的な論考を発表してきた塩田氏（以下、著者）は、本書を書き終えてこの世を去った。このことを知って評者がはじめに抱いたのは、哀悼と、著者が意外にも早く自らの仕事をやり遂げたことへの感慨だった。

太平洋文明史がインボンゴ人類学（著者の言葉）の次なるテーマであったことは、「あとがき」に触れられているとおりである。普段の会話でも、「いずれは太平洋の文明論を書くつもりだ」という著者の語りを、親交のあった者ならば、聞いたことがあるはずだ。ただ評者が「意外にも早く」と感じたのは、「太平洋史に関する古書は集めた。でも、文献研究は六〇代になってから、いわば老後の楽しみにとっておきたい。今は、フィールド（現場）をちゃんとみ

つめたい」というような著者の発言を記憶していたからである。この点を踏まえると、著者は、一〇年余りの時間を一気に駆け抜けたことになる。きっと、膨大な読書量から湧きあがるインスピレーションを形にせずにはいられない衝動に駆られていたのだろう。著者は、オペラやクラシックの「力」を借りて—著者の執筆活動は音楽と不即不離の関係にある—驚くべき速さで、それらを具現化していったと推察される。

航海記—それは、ブーゲンヴィルやクックをはじめ、大航海時代の船乗りたちが自らの長い航海の体験を記したものである。本書は、太平洋の文明史を辿る著者の「思考の航海」の記録である。その思考は、大航海時代から二一世紀の現代までの時間幅をもち、グローバル（地球）を縦横無尽にかけめぐる。読者は、対象となる太平洋上

の大小無数の島々がヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカ、アジアと次々に連結され、グローバル化のうねに成り立つ太平洋の近現代史（あるいは文明史）が明確な形を成してゆく歴史的過程を追体験することになるだろう。

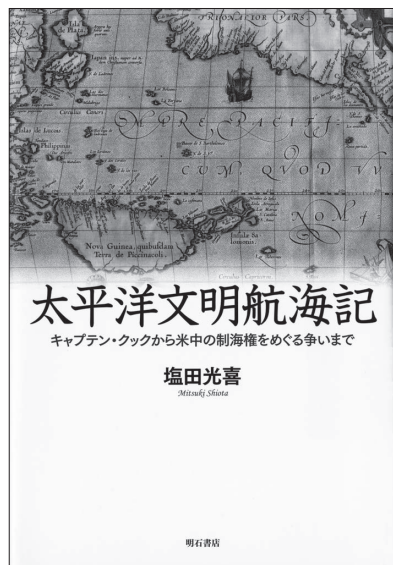
とはいえ、太平洋の歴史については、すでに多くの書物が世に存在し、それらは多かれ少なかれグローバル化に言及している。著者が本書で試みようとしているのは、太平洋に散在する島々の長い歴史を、従来とは異なる「物語」として、語り直すことなのである。その際、著者が依拠する枠組みは、一言でいえば、太平洋の覇権をめぐる政治経済学である—「太平洋の島々の針路は、常に時のグローバルな地政学的現実、更にいかなら「シー・パワー」（＝制海権）の帰趨に左右されてきたのである」（一—一五ページ）。しかも、覇権をめぐる構図は、欧米列強間の対立から、アングロサクソン（とくにアメリカ）と中国の対立へと変容していく筋書きだ。評者は、太平洋の歴史を

このように語り直した点にこそ、本書の獨創性があると考える。

●本書の構成

ここで、以上の点を踏まえて、本書の内容を概観してみることにしよう。著者は本書のどこにも章構成について説明をしていないため、本書の筋道を確認することに意義があると考える。

本書は、一九世紀のヨーロッパから話がはじまる。著者は、ホブズボームの「資本の時代」を導きの糸としながら、ヨーロッパにおける交通通信技術（具体的には、鉄道、汽船、電信）の発達に注目する。著者がこのロジスティクスを本書のキーワードのひとつに据えているのは、抜き差しならぬそれがグローバルイゼーションと制海権争いを支える装置だからである。



第二章から第四章までは、大航海時代における太平洋島嶼諸社会の変貌が描かれている。太平洋地域には、地理上の「発見」にともない、ピーチコマー（船を降り、現地に溶け込んだ白人水夫）、捕鯨船員、商人、宣教師が漸次的に現れ、現地社会の変容を促していった。当初、太平洋地域における白人の経済活動は、海洋や島々に自生する動植物を捕獲・伐採し、遠隔地の市場まで運んで利益を得るという資源収奪型のそれだったが、一九世紀半ばからは、ハワイなど一部の島々で、白人たちが（現地民から）収奪した土地で生産活動をを行うというプランテーション経済が発達した。これは、白人たちの定住化、現地人たちの人口移動、そして白人と現地人の濃密な相互作用を促したという点で、太平洋島嶼民の社会や文化に甚大な影響をもたらしたのだった。

第五章と第六章のテーマは、植民地経験である。太平洋の島々は、一九世紀半ばから世紀転換期にかけて、欧米列強の植民地となっていたが、著者はその帝国主義的な植民地分割を、制海権の確保という観点から整理している。そのうえで、著者は、これまで調査を

行ってきたパプアニューギニアを例に挙げて、植民地の実態―白人と現地人の支配従属関係や、石器時代と二〇世紀的技術の併存という「いびつな近代化」―を仔細に描き出す。

第七章の太平洋戦争と戦後体制も、制海権の争いという点で貫かれている。太平洋戦争では、太平洋をめぐる覇権争いに日本が登場するが、ロジスティクスの観点から日本の敗北が描かれる。そして著者は、戦後の太平洋を「アンザスの湖」と化すアングロサクソンの覇権に注目する。とりわけ、アンザスと日米安全保障条約を通じて、「極東の対共産圏への兵力配置とロジスティクスの確保」（一一四ページ）を実現していくアメリカの北太平洋戦略が強調されている。

第八章では、広大な国土や資源をもつ国での資源収奪型の乱開発、資源のない極小島嶼国（マイクロ・ステート）の窮状、怪しいパスポート・ビジネス、タックス・ヘイブンなど、独立を遂げた太平洋諸国の諸問題が取り上げられている。この背景について、著者は、「頭が切れて、口が達者で、マネーが大好きな白人達」が跳梁

跋扈し、太平洋諸国を食い物にしているとまで喝破するのである。

第九章では、太平洋におけるアングロサクソンの覇権を揺るがす中国の台頭を問題にしている。「キャプテン・クック以来のアングロサクソンの太平洋におけるシー・パワー（制海権）は再びチャレンジを受けつつある」（一五八ページ）―著者は、この米中の対立が、二一世紀の太平洋を特徴づける基調音／不協和音となっていくことを予見する。

末尾には、第四〇回太平洋諸島フォーラム（二〇一一年九月開催）の政治経済的背景をめぐる単独の論考（黒崎岳大氏と共著）が補遺として採録してある。そこには、太平洋諸国の海に眠る海洋底資源が期待されていることを踏まえ、今後ますます太平洋をめぐる覇権争いは続くだろうことが示唆されている。

以上のように、著者は、持ち前の力業（筆力と物語構成力）で、太平洋の過去と現在をひとつの筋を持った「物語」として描き直したのである。

ただし、このような「物語」は、太平洋の覇権をめぐる列強の圧倒的な政治・経済力を読者に印象づ

けてしまうかもしれない。それを否定するつもりはないが、オセアニア歴史人類学の研究成果からすれば、太平洋の人々がそのような勢力（あるいはグローバル化）と交渉しながら、自らの社会を主体的に再編してきたことも事実である。誤解のないようにしておく。著者は太平洋島嶼民の主体性に無自覚ではまったくなく、むしろそれを現場で感じ取り、知る人物である。著者には、パプアニューギニアの高地に暮らすインボング族を対象に長く地道な調査研究（インボング人類学）を続けてきた経験があるからだ（その代表作は『石斧と十字架』である）。本書評では紙幅の関係上割愛したが、本書を読めば、「環太平洋世界と太平洋世界のインタラクティブ」（二二ページ）を随所で目の当たりにすることだろう。よって著者になり代って、評者は、本書が大国の覇権争いの背後にあるローカルな力学や現地人の主体性への深い理解の上に成り立っていることを、最後に強調しておきたい。

（ばば）
じゅん／首都大学東京客員
研究員